

氏 名	喬 晋 建
学 位 の 種 類	博士（経営学）
学 位 記 番 号	博乙第 53 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 13 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文の題目	中国工場における CSR 活動 ―鴻海の労働問題を中心に―
論 文 審 査 委 員	主査 神奈川大学 教授 丹 野 勲
	副査 神奈川大学 教授 行 川 一 郎
	副査 神奈川大学 教授 田 中 則 仁
	副査 神奈川大学 教授 榊 原 貞 雄
	副査 横浜市立大学 教授 中 山 健

【論文内容の要旨】

本論文は、8つの章から構成されており、各章の内容は以下である。

第1章では「CSR活動の理論」について概説している。CSR(Corporate Social Responsibility)の概念、CSR理論の歴史、CSRの理論、CSRの市民権の確立等について考察している。また、CSR活動とBOP(Base of the Economic Pyramid) ビジネスとの関係、BOPビジネスの概念、BOP市場の特徴、BOPビジネスの広がりと言った内容についても論じている。

第2章の「CSR活動の実践」では、欧米先進国を中心した世界のCSR活動の取り組みの実態について考察している。具体的には、国際機関・欧米企業・日本企業等の取り組みについて論じている。そして、中国工場でのCSR活動と深く関連しているSA8000規格を重点的に取り上げ、国際的な労働基準（SA8000）を制定する必要性、SA8000規格の由来と内容、日本企業と中国企業のSA8000認証状況等について論じている。

第3章の「欧米企業の中国工場監査」では、海外調達先の工場監査(Factory auditing, factory monitoring)に関して、主にウォルマートの監査事例について検討している。欧米企業を主体とする中国工場監査の実施において、多くの問題点がみられる。これらの問題を解決する方向性について、抜き打ち監査、第三者監査、監査費用分担、経済インセンティブの付与といった企業レベルの改善策を提言するとともに、労働関連法規の制定と執行に関する中国政府の積極的な努力の重要性を強調している。

第4章の「チャイナ・プライス」では、チャイナ・プライス(the China Price)の概念・原因・結果・問題点について論究している。チャイナ・プライスが実現した原因を、中国工場の低コスト体質、大量生産による規模の経済性、OEM生産方式、産業クラスター効果、従業員の社会保障制度の不備、委託先のシャドウ工場の存在などとしている。その結果として、メイド・イン・チャイナの製品の世界的な広がり、世界中の消費者ならびに一部の外国大手企業の利益拡大、海外競合メーカーの緊張感の高まり、貿易摩擦の恐れ、中国工場労働者の人権侵害、残業超過の常態化、労働者の健康被害、(不良商品から環境破壊までの)被害問題の国際化、などを検討している。

第5章の「農民工の労働権利」では、まず中国におけるCSR活動はかなり低いレベルにとどまっているという全般状況を説明している。次に中国工場の一般労働者の主体となる農民工に焦点を

当て、農民工に注目する理由、農民工の概念、農民工の規模、農民工の職業別状況という観点から、農民工の全体像を提示している。さらに、職業選択の多様化、教育水準と権利意識の向上、都市部への帰属意識の強化、出稼ぎ先選択の多様化、労働訴訟の多発、という社会的変化の中で、新世代農民工の姿を描いている。また、中国における労働者権利擁護の歴史、労働契約法の制定、中国政府の法律執行努力などについて考察している。最後は問題解決の方向性について、経営学の見地から検討を加えている。

第6章の「中国工場の代表格となる鴻海」では、まず鴻海という企業を研究対象に選ぶ問題意識と研究方法について考察している。次に先行研究となる学術論文および文献についてサーベイし、鴻海の企業概況、鴻海創業者である郭台銘の生い立ちと経営スタイルなどについても論究している。

第7章の「鴻海の労働問題」では、鴻海の中国工場で起きた一連の労働問題が発生する原因を探っている。2010年から現在までに鴻海の中国工場で起きたCSR関連の事例40件について研究している。その事例の原因として、低賃金、長い残業時間、労働強度、安全衛生、未成年労働、不当解雇、厳しい管理、従業員団体、厳格な就業規則、人間関係などを指摘している。

第8章の「鴻海の労働問題の解決策に関する提言」は、本論文の結論部分の章である。各種の労働事件を減らすために鴻海が取り組むべき課題として、企業イメージの改善、労働力不足の対策、教育実習制度の是正、公共資源乱用の中止、賃金上昇への対応、人材の現地化、情報の公開、CSR活動への重視と独自の企業行動規範の作成という8項目を提言している。アップルなど世界の大手企業から生産業務を受注している鴻海にとって、CSR活動に積極的に取り組み、率先して高次元の社会的責任を履行することが求められている。経営学者ポーターらの戦略的CSRの理論で考えると、鴻海はリスクを回避するための「守りのCSR」の姿勢から「攻めのCSR」に切り替え、CSR活動を重視することが必要である。鴻海は、ほかの中国企業との差別化を図り、鴻海独自の企業行動規範を作成することが重要である。CSR活動に対する鴻海の取り組みには様々な問題点があるものの、中国国内では鴻海は特別に立ち遅れているというわけではない。むしろ、鴻海は中国の労働関係の諸法規を概ね順守しており、比較的に良い企業だとも言える。鴻海が中国工場全体の代表格であるという視点から考えると、鴻海の労働問題に対する本論文の考察と分析は、中国工場のCSR活動の現状と今後の方向性を理解するために、大いに役立つであろうと述べている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、CSR(Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任)の理論を包括的に研究した後、台湾の大手企業で、アップルのスマートフォンのOEM生産企業などとして中国などに大きな生産工場を持ち、シャープを買収した企業として知られている鴻海を事例として取り上げ、その中国工場でのCSRに関して理論的・実証的に考察している。本論文の評価すべき点として、以下がある。

第1は、CSRに関する理論の歴史的な流れを体系的に考察していることである。CSR活動の先進国であるヨーロッパとアメリカだけでなく、日本、中国も含め、世界中で展開されているCSR活動の実務的な取り組みである、企業行動規範(Code of Conduct)、国連GC(The Global Compact)、SA(Social Accountability) 8000、ISO(International Organization for Standardization) 26000など、広範囲にCSR活動について考察している。

第2は、中国でのCSRに関連する取り組みや現状について、具体的に議論していることである。欧米企業の海外調達先への中国工場監査というほとんど知られていない研究課題に取り組み、工場

監査の背景、方法、問題点、問題解決の方向性などについて、ウォルマートの事例を中心として詳しく解明している。さらに、チャイナ・プライスという概念を切り口にして、経営学の視角からその意味、それが実現した原因、それがもたらす結果、その持続可能性、その仕組みなどを詳しく検討している。

第3は、CSR活動の基本は労働権利であるとし、中国工場労働者の主体となる出稼ぎ農民工について詳しく考察していることである。本論文では、中国におけるCSR活動の全般状況、農民工の全体像、農民工の労働権利の侵害状況とその社会的背景、新世代農民工の姿、労働者権利保護に対する政府姿勢などを詳しく解明したうえ、経営管理論とCSR理論の視角から農民工の労働権利にかかわる諸問題を解決する方向性について独自の見解と提言を展開している。

第4は、鴻海は世界的に注目されている企業で、中国でも多数の従業員を持ち、シャープを買収した企業としても知られているが、鴻海に関する学術的、体系的な研究は世界的にみても極めて少なく、本論文はその先駆的研究であるといえる。鴻海は、EMS（Electronics Manufacturing Service）企業として黒子役に徹しているため、鴻海ならびに創業者の郭台銘は秘密主義のベールに覆われている。本論文では、収集できるあらゆる情報を慎重に、学術的に整理・分析したうえ、鴻海の企業概況と企業規模、創業者である郭台銘の生い立ちと経営スタイルについて、その実像に迫っている。本論文では、独自の見解を展開しており、その点でオリジナリティーが高い。

第5は、本論文の結論（第8章）で、鴻海のCSR活動への学術的視点からの提言を行っていることである。具体的な鴻海への提言として、企業イメージの改善、労働力不足の対策、教育実習制度の是正、公共資源乱用の中止、賃金上昇への対応、人材の現地化、情報の公開、CSR活動への重視と独自の企業行動規範の作成という、8項目の課題に取り組むべきであるという提言である。近年の鴻海は、部分的とはいえ、本論文の提言している方向に向かって動き出している。

鴻海に関する情報源も対象範囲も大きく制限されているなかで、本論文での鴻海の労働問題の実態、背後の原因、解決する方向性などを経営学の視点から解明しようとする努力は、大いに有意義である。先行研究では、鴻海の実態を客観的・学術的に研究する文献は極めて少ない。問題実態の解明、背後原因の究明、解決方法の提示などの面において、本論文は世界的にみても先駆的で、体系的・理論的にも優れた研究であると評価できるであろう。CSR活動に対する鴻海の実態に様々な問題点があるものの、中国国内では鴻海は特別に立ち遅れているというわけではない。むしろ、鴻海は中国の労働関係の諸法規を概ね順守しており、比較的に良い企業だとも言える。鴻海が中国工場全体の代表格であるという視点から考えると、鴻海のCSR活動に関する本論文の分析は、中国工場におけるCSR活動の現状と今後の方向性を理解するために、大いに有意義な研究であろう。

なお、審査委員から、本論文に対して以下のような指摘もあった。

第1は、鴻海に関する外部資料（論文、文献、新聞・雑誌記事等）の分析が中心で、鴻海内部での実証的調査研究が不十分である。

第2は、鴻海のCSR活動とアップルなどのOEM委託元の多国籍企業のCSRとの関係について、もう少し分析してほしい。また、鴻海の将来の国際化戦略と生産技術高度化に対するCSRとの関係について研究してほしい。

第1の指摘については、鴻海という企業は企業内の情報を外部に公にしないという現状の中で、本論文は社員や関係機関への聞き取り、工場視察、外部資料の収集等、可能な最大限の範囲で情報・収集を行い、分析している点は評価できるであろう。第2の指摘については、今後の研究課題であろう。

以上のような課題も存在するが、これは、博士論文の価値を損なうものではなく、今後の研究課

題であるとしたい。

以上の点から、本論文は博士論文に十分値するものと認定する。